

過去の指導者が生涯音楽学習の意識・行動に及ぼす影響

—合唱活動を中心に—

小坂 光

(本講座大学院博士課程前期在学)

Influence of Past Directors on Lifelong Music Learners' Motivation and Action

Hikari KOSAKA

Abstract

In the context of lifelong learning, it is important to use clear terms for learners to successfully undertake learning. Because lifelong music learners are influenced by past musical experiences, their characteristics are best understood from the viewpoint of their musical experiences. The current study sought to clarify the influence of past directors on lifelong music learners' motivation and action. In September 2018, a questionnaire survey was administered to 107 singers in five choirs. The survey involved three scales: "The director that most affected the music learner (including their music teacher)", "Learning motivation" and "Learning action". These three scales were based on the author's previous research. The results revealed several main findings. First, the learner's growth for directors increased the occurrence of introjected regulation. In self-determination theory, introjected regulation indicates that self-determination is low, and is not considered desirable. The current results suggested that introjected regulation was lower for independently practicing singers. On the other hand, director's advice increased learners' intrinsic motivation in practice. Thus, the current results suggested that directors' advice can benefit learners' practice, rather than determining the direction of their growth. This appears to be a characteristic of music learning. Because singers use voice in chorus, directors must reduce psychological obstacles and provide music for singers. In addition, the current study examined whether learners' descriptions of previous music directors were positive or negative. The results revealed that directors' advice in practice led in a positive direction for learners, but differed from self-determination. Kawamura (2004) proposed that directors are likely to provide learners with knowledge in music learning. The current results clarified the challenge in music learning identified by Kawamura, in which the learner and director must work in collaboration. In the current study, the director's advice in practice appeared to lead to beneficial growth in the lifelong learner. Thus, it may be necessary to examine the perspectives of both learners and directors to promote effective lifelong learning.

1 研究の背景と目的

生涯学習研究の文脈では、人々がどのような条件や環境によって学習行動を形成するのか、また学習の動機づけはどのように行われるのかについて明らかにすることが重要である。音楽の領域の生涯学習では、音楽聴取は音楽表現の十分条件ではなく、音楽を聴くのが好きな人でもなんらかのきっかけがないと音楽活動には至らないことが示唆されている(法岡, 1990)。また、音楽学習という性質上、指導者から学習者へ働きかけ、学習者のニーズ充足へ向けて指導者が援助を行うことが重要だと言われるが、この立場では学習者の要求に沿って技術や知識を単に学習者に提供するという学びの状況が生まれやすい。しかし本来「学び」とはその場に居合わせる者が主体としてかわり、その相互作用の中から新しい意味を生成していく在り方を指す。成人の音楽の学びは、音楽をめぐる学習者、指導者、共同学習者によって編み直さ

れていくため、共同的な学びをどう創り出すかを追求する中で、成人音楽学習の理想的なとらえ直しが可能となってくる（川村，2004）。

このように、音楽的行動の生起条件や生涯音楽学習の動機づけについての研究は蓄積されている。しかし、そもそも生涯音楽学習者は音楽科の授業や部活動、音楽のレッスンなどの音楽経験からの影響を受けて現在の学習に至っており、それぞれの音楽経験をとおして現在の自己が形成されていることから、現在の学習者の自己像形成に至ったプロセスや要因に着目して、学習者の特徴を明らかにすることが必要である。

本研究では、合唱活動を行っている人を対象に、とりわけ過去の指導者からどのような影響を受けたかを受けたのかに焦点を当て、「合唱活動を継続しよう」「もっと学ぼう」という意識や行動に対してどのような影響を与えているのかについて明らかにすることを目的とする。

2 研究の方法

生涯学習として合唱活動を行っている人を対象に、現在の学習意識、学習行動、過去の音楽学習の指導者についての質問紙調査を行い、共分散構造分析を用いて結果の分析を行った。

3 質問紙調査

3.1 調査の概要

時期 2018年9月

対象 アマチュア合唱団で合唱活動を行っている人 107名

内容 (抜粋)

- ①過去に自分に最も影響を与えた過去の音楽の指導者について（学校の教員でも可） 北村・永山・齊藤（2007）、菅（2009）を参考に筆者作成
- ②学習意識 西村・河村・櫻井（2011）が Self-determination Theory (Deci & Ryan, 2002) をもとに作成した「内的調整」（学習自体が目的化した状態）「同一化調整」（学習すること以外に重要な目的があり、学習はその目的を達成する手段とされる）「取り入れ的調整」（罪悪感や不安の回避などの消極的な理由）「外的調整」（規則などの外発的な要求や報酬、罰に基づく動機づけ）からなる自律的学習尺度を音楽の文脈に援用して使用。
- ③学習行動 中谷（1998）を参考に筆者作成。

3.2 尺度の検討

結果を分析するためにそれぞれの尺度について因子分析を行った。

①自分に最も影響を与えた過去の指導者（最尤法、プロマックス回転）

	I	II	III	M	SD
I 練習中の工夫 $\alpha=.74$					
7. 私に影響を与えた指導者は、練習の際に適切な練習メニューを与えてくれた	1.16	-0.09	-0.21	3.00	.58
6. 私に影響を与えた指導者は、団員が歌うときの心理的な負担を軽くしてくれた	.61	-0.05	.03	2.85	.76
II 学習者成長志向 $\alpha=.72$					
4. 私に影響を与えた指導者は、合唱を通しての団員の人間的な成長を重視していた	-0.15	.74	.04	2.97	.70
2. 私に影響を与えた指導者は、団員が自発的に音楽表現できることを重視していた	-0.10	.70	.03	3.15	.65
5. 私に影響を与えた指導者は、合唱を通しての団員の音楽的な成長を重視していた	.23	.68	-0.14	3.22	.61
III 音楽的スキル志向 $\alpha=.60$					
1. 私に影響を与えた指導者は、正しい音程や安定したテンポなど、楽譜に忠実に歌うことを重視していた	-0.20	.00	.69	3.10	.75
3. 私に影響を与えた指導者は、団員に適切なレベルの曲を与えてくれた	.28	.06	.61	3.00	.67
因子間相関	I	II	III		
	I	—	.56	.63	
		II	—	.46	
			III	—	

②現在の学習意識（重みなし最小二乗法，プロマックス回転）

	I	II	III	IV	M	SD
I 取り入的調整 $\alpha=.85$						
9. 私が合唱活動を行っているのは、合唱で友達に負けたくないからだ	.94	-.03	-.07	-.13	1.75	.80
12. 私が合唱活動を行っているのは、友達にバカにされたくないからだ	.78	-.13	.05	.06	1.35	.61
10. 私が合唱活動を行っているのは、周りの人より上手く歌いたいからだ	.70	.00	-.01	-.17	2.19	.92
11. 私が合唱活動を行っているのは、まわりの人に歌が上手だと思われたいからだ	.66	.13	-.08	.11	2.04	.88
13. 私が合唱活動を行っているのは、うまく歌えないとみじめな気持ちになるからだ	.66	-.12	.07	.14	1.70	.89
II 内的調整，同一化調整 $\alpha=.78$						
8. 私が合唱活動を行っているのは、合唱をするということは自分にとって大切なことだからだ	-.22	.75	-.25	.18	3.31	.72
5. 私が合唱活動を行っているのは、将来の成功につながるからだ	.13	.67	.07	.36	2.16	.81
4. 私が合唱活動を行っているのは、自分がやりたいと思うからだ	-.27	.58	.08	-.46	3.72	.50
2. 私が合唱活動を行っているのは、難しいことに挑戦することが楽しいからだ	.00	.55	.08	.01	2.96	.73
3. 私が合唱活動を行っているのは、新しい知識や技術を身に付けることがおもしろいからだ	.08	.39	.13	-.23	3.45	.56
7. 私が合唱活動を行っているのは、自分のためになるからだ	.25	.39	-.09	-.16	3.35	.64
6. 私が合唱活動を行っているのは、自分の夢を実現したいからだ	.23	.25	-.11	.24	2.43	.92
III 外的調整（強制力） $\alpha=.85$						
15. 私が合唱活動を行っているのは、まわりの人から「やりなさい」と言われるからだ	-.09	-.02	1.02	.00	1.13	.34
14. 私が合唱活動を行っているのは、やらないとまわりの人がうるさいからだ	-.10	.02	.77	.23	1.19	.44
16. 私が合唱活動を行っているのは、上手く歌えないと怒られるからだ	.19	.00	.50	-.10	1.15	.43
IV 外的調整（集団的性質） $\alpha=.62$						
1. (逆転) 私が合唱活動を行っているのは、合唱をすること自体がおもしろいからだ	-.26	-.21	-.12	.73	1.38	.60
17. 私が合唱活動を行っているのは、合唱をするということが規則のようなものだからだ	.06	.06	.07	.71	1.43	.74
18. 私が合唱活動を行っているのは、みんなが当たり前のように合唱をしているからだ	.00	.26	.20	.46	1.57	.76
	因子間相関					
	I	II	III	IV		
I	—	.33	.26	.25		
II		—	-.11	-.25		
III			—	.40		
IV				—		

③現在の学習行動（主因子法，プロマックス回転）

	I	II	III	IV	M	SD
I 自主的な練習行動 $\alpha=.78$						
8. 私は、できない部分に何度も取り組んでいる	.88	-.08	.11	-.10	2.98	.76
7. 私は、家で自主練習を行っている	.80	.14	-.04	-.08	2.85	.74
6. 私は、指導者に言われたことを記録している	.58	-.28	-.02	.26	3.25	.70
II 合唱団外での学習 $\alpha=.66$						
9. 私は、声楽、ボイストレーニングのレッスンを外部で受けている	-.19	.75	.01	.07	1.90	1.01
10. 私は、合唱の講習会（セミナー）に積極的に参加している	.30	.68	-.06	-.04	1.98	.78
III 基礎的な音楽行動 $\alpha=.66$						
1. 私は、正しい音程やリズムを重視して歌っている	.05	-.08	.73	-.07	3.41	.53
2. 私は、正しい発声を重視して歌っている	.05	.12	.69	.01	3.33	.60
IV 自発的な音楽行動 $\alpha=.59$						
5. 私は、他の人の声を聴いて歌っている	-.15	.09	-.01	.68	3.28	.67
11. 私は、演奏会（音楽全般）をよく聴きに行く	.09	.08	-.20	.57	2.70	.73
12. 私は、テレビやCDなどでよく音楽を鑑賞する	.01	-.10	.04	.41	2.89	.84
3. 私は、自分なりに表現を考えて歌っている	-.04	.10	.25	.39	3.28	.69
	因子間相関					
	I	II	III	IV		
I	—	.30	.32	.50		
II		—	.18	.37		
III			—	.46		
IV				—		

3.3 共分散構造分析のモデル図

3.2 で行った因子分析の結果をもとに、共分散構造分析を行った。共分散構造分析のモデルを図 1 に示す。

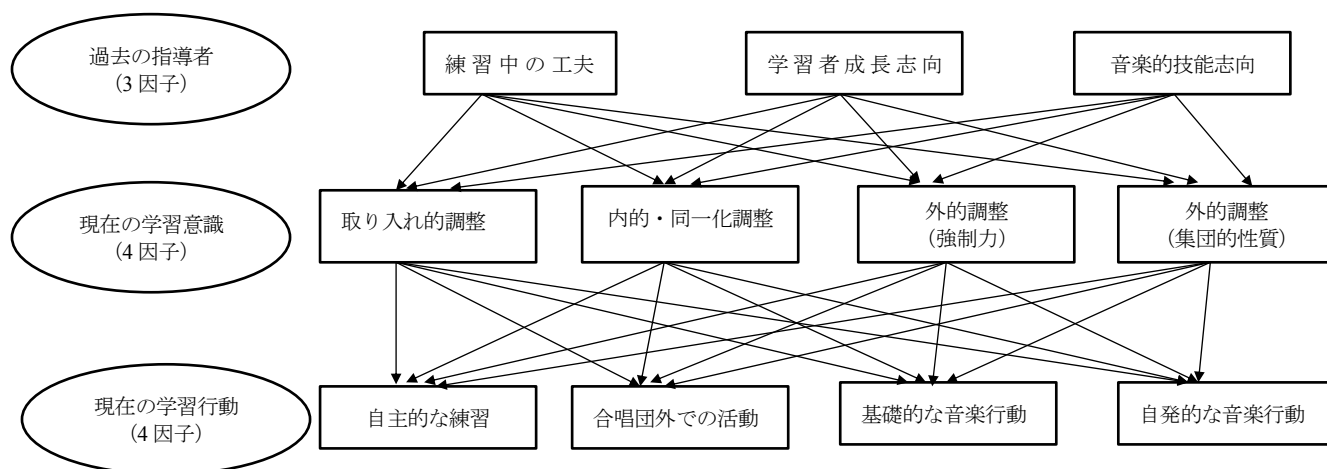


図 1 共分散構造分析のモデル図

3.4 結果

3.4.1 過去の指導者が学習者の意識・行動に及ぼす影響

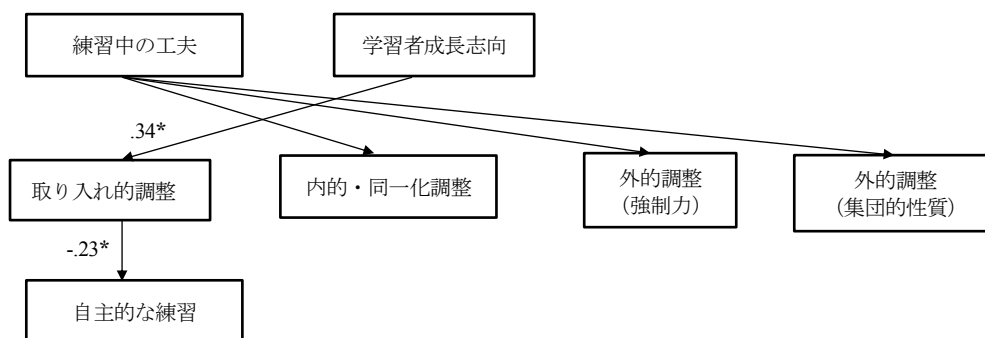


図 2 過去の指導者が学習者の意識・行動に及ぼす影響

過去の指導者が学習意識，学習行動に及ぼす影響を図 2 に示す。学習者が感じる指導者の学習者成長志向は，自己決定理論における外的な意識の一部である「周りの人よりうまく歌いたい」などの取り入的調整を高めていた。音楽学習における最終目標は音楽自体への意識である内的調整であり，取り入的調整は自己決定性の低いレベルにある。そのため指導者の学習者成長志向は学習者の自己決定性を低めている可能性が示唆された。そして取り入的調整は自主的な練習を低めていた。人と比べたときの意識は自主的な練習行動を低めるという結果が得られ，練習の中で誰かを模範にして学習を促していくという形は合唱活動においてはマイナスな状況であることが示唆された。古籟（1973）は，集団感情や士気のような特徴は生産性と密接な関係があることを述べている。凝集性は，集団活動を強く動機づける条件であり，凝集的な集団は凝集性を欠く集団よりも緊張下でより多く働くことができるとともに，士気や所属感，一体感と深く関連しており，成員に情緒的安定をもたらすことが示唆されている。このような凝集性がはたらいっていると考えられる合唱活動において，「人と比べる」などの競争意識をもたせるような取り入的調整を高めることは自主的な練習を低めてしまう。その一方，学習者が感じ取る指導者の練習中の工夫は内的調整にプラスの影響を与える傾向がみられた ($p=.07$)。指導者が学習者に対して「このような学習者に

なってほしい」という思いをもつことよりも、学習者が純粋に音楽に向き合うために必要な練習手段や声を出すための心理的な障壁を下げるなどの練習中の工夫が必要であることが示唆された。合唱活動においては声を出す、歌うという心理的なハードルを下げるのが必須である。ともに活動している仲間に認められ、安心して声を出せるという要素が学習への意識や行動に影響していることも考えられる。また練習中の工夫は、外的調整を低くするという傾向もみられた（強制力 $p=.06$ ，集団的性質 $p=.06$ ）。

過去の指導者から現在の学習行動へのパスを検討するため、モデルを変更して再分析を行った



図3 過去の指導者が現在の学習行動に及ぼす影響

過去の指導者が現在の学習行動に及ぼす影響を図3に示す。練習中の指導者の適切な練習メニューや心理的負担を軽くする工夫は、基礎的な音楽行動にプラスの影響を与えている。指導者の練習における工夫が学習者の基礎的な音楽行動を高めているということは、調査対象団体の指導者は音楽の指導者として学習者の音楽行動を高めるはたらきをしているといえる。また、過去の指導者の学習者成長志向は、自発的な音楽行動を促進していた。集団のなかで合唱をするという活動において、音楽経験が少ない学習者が自発的にひとりひとり自立して音楽行動を行っていくのは難しい。それは合唱活動という学習形態が影響しているといえる。前述した古籐（1973）の「凝集性は士気や所属感、一体感と深く関連しており、成員に情緒的安定をもたらす」という理論があるように、学習者が自立して自発的に音楽活動を行うことに関して凝集性はむしろマイナスにはたらいていることが考えられる。しかし、指導者の学習者成長志向によって自発的な音楽行動が高められている。集団の中で自己を認識し、音楽表現をするということに関しては、指導者の影響が大きい。

3.4.2 過去の指導者に対する記述による比較

過去の指導者に対する記述から、指導者に対してプラス志向をもっていた群とマイナス志向をもっていた群に分けることができた。回答の人数比を図4に示す。

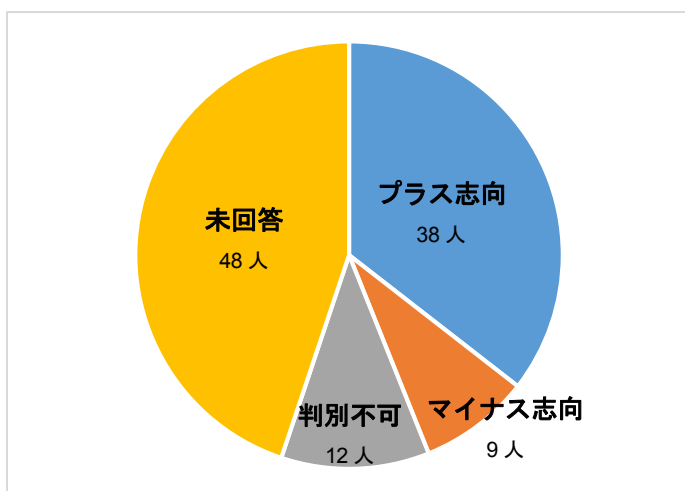


図4 過去の指導者に対する記述の割合

プラス志向をもっていた群の代表的な意見は「学生主体となって音楽が作れるよう、程々の距離をとってくれたこと」「個人でみてくれたときはとても勉強になった」という回答が見られた。

マイナス志向をもっていた群の代表的な意見は「自発的を強要されすぎて、結局自分がなにを得たのかよくわからなかった」「学校の歌の試験がつかかった」という回答がみられた。

過去の指導者に対する志向が学習者の意識や行動にどのような影響を及ぼしているか検討するため、2つの群に分けて比較を行った。

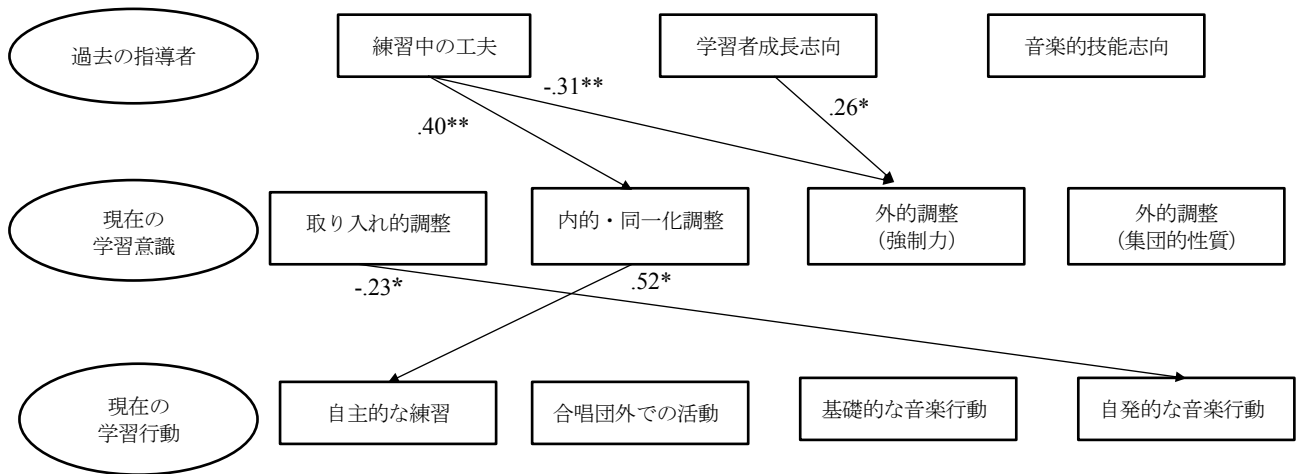


図5 プラス志向群のモデル図

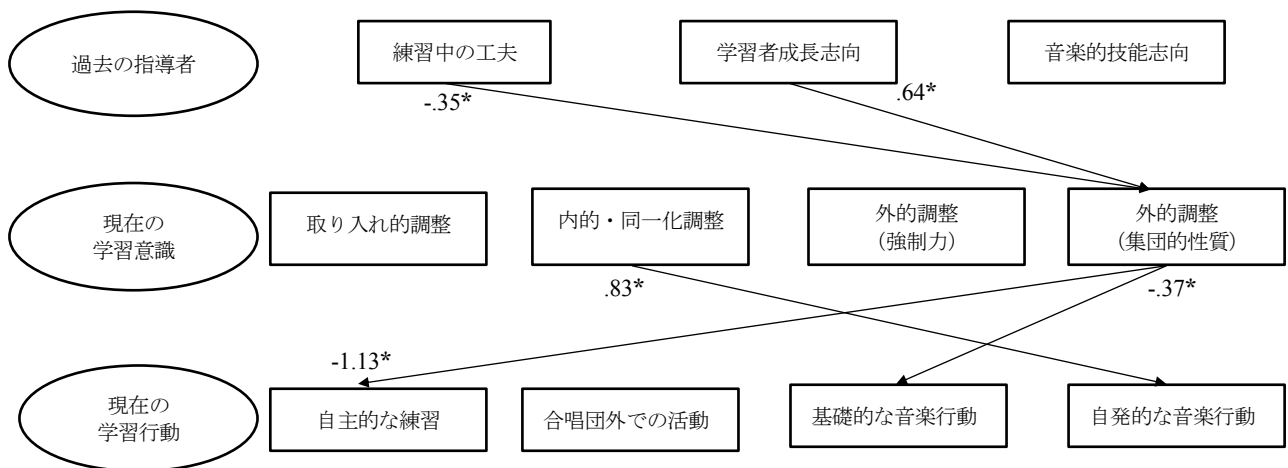


図6 マイナス志向群のモデル図

プラス志向群の学習者のパス図を図5に示す。過去の指導者の練習中の工夫は内的・同一化調整を高め、学習者の自主的な練習を促進していた。また練習中の工夫は外的調整（強制力）を低めていた。学習者成長志向は外的調整（強制力）を高めていた。取り入れ的調整は自発的な音楽行動にマイナスに影響を与えていた。プラス群の結果からは、指導者から学習者に音楽の知識や技能が伝達されるような音楽学習の姿が明らかとなった。

マイナス志向群の学習者のパス図を図6に示す。過去の指導者の練習中の工夫は外的調整（集団的性質）を低めていた。また、学習者成長志向は外的調整（集団的性質）を高めていた。その結果、自主的な練習と基礎的な音楽行動にマイナスに影響を与えていた。全体の結果でも明らかになったように、指導者の練習中の工夫によって学習者は純粹に音楽に取り組めるようになる。その結果が外的調整（集団的性質）の低下としてあらわれている。逆に指導者が学習者に対して「このような学習者になってほしい」と思うことが学習者に対して「周りがやっているからやる」という外的調整（集団的性質）を高めていることが考えられる。また、内的・同一化調整は自発的な音楽行動に高い影響を与えていた。マイナス群の結果からは、すでに自立した学習を行おうとしているが、指導者によってその行動が阻まれる危険性を含む学習者の姿が明らかになった。

4 総合考察

合唱活動において過去の指導者が学習者に及ぼす影響について検討してきた。学習者が感じる指導者の学習者成長志向が取り入れ的調整を高めており、取り入れ的調整は自主的な練習を低めていた。これは、生涯学習者としては自己決定性の低い状態にあることが考えられる。

その一方、学習者が感じ取る指導者の練習中の工夫は内的調整にプラスの影響を与える傾向がみられた。指導者が学習者に対して、ある成長志向をもつことよりも、学習者が純粋に音楽に向き合うために必要な練習手段や声を出すための心理的障壁を下げるなどの練習中の工夫が必要であることが示唆された。合唱活動においては声を出す、歌うという心理的なハードルを下げるのが必須で、共同学習をしている仲間にも認められ、安心して声を出せるという要素が学習への意識や行動に影響していることも考えられる。

また、過去の指導者に対する記述がプラス志向である群とマイナス志向である群に分けて検討をおこなった。指導者の適切な練習メニューや心理的負担を軽くする練習中の工夫は、プラス群にとっては内的調整・同一化調整を高め、外的調整（強制力）を低めていたが、マイナス群にとっては外的調整（集団的性質）を低めていた。どちらの群もよい方向に向かっているという面では同じであるが、自立的学習におけるレベルは異なる。プラス群が内的調整・同一化調整にプラスに影響しているのに対し、マイナス群は影響がない。学習者成長志向は、プラス群にとっては外的調整（強制力）を高め、マイナス群にとっては外的調整（集団的性質）を高めていた。これは、プラス群学習者は指導者からの期待に応えたいという意識を高め、マイナス群の学習者は「まわりがやっているから仕方ない」という意識を高めているのではないだろうか。プラス群において、取り入れ的調整は自発的な音楽行動にマイナスに影響していることから、集団活動の中で人と比べるなどの行為は自発的な行動を抑制してしまう。表現を考える、音楽鑑賞などの自発的な行動を促進するためには、指導者の練習中の工夫が求められる。内的調整・同一化調整は、プラス群においてできない部分を補填する練習を行うなど自主的な練習行動を促進し、マイナス群においては表現を考えて歌うなどの自発的な音楽行動を促進していた。指導者に対する志向は学習者の音楽学習スタイルにも影響を与えている。マイナス群において、外的調整（集団的性質）は自主的な練習行動や基礎的な音楽行動を抑制していた。外的調整（集団的性質）は指導者の「学習者成長志向」によって高められていることから、指導者が学習者に対して成長を求めすぎず、より音楽と純粋に向き合えるように工夫していくことが重要である。

5 おわりに

練習中の指導者の工夫が合唱活動を行う生涯音楽学習者を育成する要因として大きく影響している。合唱活動は特に「声」を扱うため、学習者が声を出す際の心理的障壁を下げることで、自主的な練習行動や自発的な音楽行動を促進することができる。しかし成人学習という性質上、指導者が学習者を「成長させる」という意識を持ちすぎってしまうことは外的調整を高めることにつながってしまう。

川村（2004）は、成人の音楽学習の領域では、学習者が主体となり指導者が客体になるという関係が生まれやすく、そのような関係の中で学習者の要求に沿って技術や知識を単に学習者に提供するという学びの状況が生まれやすいことを指摘している。本研究の結果は川村の指摘している音楽学習における問題を統計的に明確にしたといえるだろう。学習の場にいる人が共同的に、そして純粋に音楽と向き合うための指導者の工夫が望ましい生涯音楽学習者の育成につながるのではないだろうか。そのような生涯学習をすすめていくためには、学習者と指導者それぞれがどのように音楽の学習をとらえていくかをさらに明らかにする必要がある。

引用・参考文献

- 川村有美（2004）「物語としての音楽の学びに関する一考察—成人のピアノ学習を中心として—」『学校教育学研究論集』第10号，pp.61-71
- 北村勝朗，永山貴洋，齊藤茂（2007）「優れた指導者のもつメンタルモデルの質的分析」『教育情報学研究』

第6号, pp.7-16

丸林実千代 (1999) 『生涯音楽学習入門』 音楽之友社

丸林実千代 (1993) 「生涯学習社会における音楽学習の機会提供はどうあるべきか—『コミュニティ形成』を目指した音楽学習の事例の検討を通して」『音楽教育学』第23巻第2号, pp.36-39

元吉ひろみ (2009) 「60歳以上のピアノ学習—アンドラゴジー・ジェロゴジーの観点から」『音楽教育学の未来』日本音楽教育学会, pp.266-279

中谷素之 (1998) 「教室における児童の社会的責任目標と学習行動, 学業達成の関連」『教育心理学研究』第46巻第3号, pp.291-299

西村多久磨, 河村茂雄, 櫻井茂男 (2011) 「自律的な学習動機づけとメタ認知的方略が学業成績を予測するプロセス」『教育心理学研究』第59巻, pp.77-87

法岡淑子 (1990) 「現代青年の音楽表現行動形成過程 : ケース・スタディによる音楽歴分析を中心として」『滋賀大学教育学部紀要, 人文科学・社会科学・教育科学』第40巻, pp.169-182

Ryan, R. M. & Deci, E. L. (2000) Self-Determination Theory and the Facilitation of Intrinsic Motivation, Social Development, and Well-Being. *American Psychologist*, 55, pp.68-78

ラドシー, R. E., ボイル, J. D. [徳丸吉彦, 藤田芙美子, 北川純子共訳] (1985) 『音楽行動の心理学』 音楽之友社

高萩保治, 中嶋恒雄 (2000) 『音楽の生涯学習—理論と実際』 玉川大学出版部

菅裕 (2009) 「経験年数の異なる5名の吹奏指導者の演奏指導方法と指導観の比較」『音楽教育学』第39巻第1号, pp.13-24